

挑戦の140年

SCENE-8

1891-1913

「ゼミナールの誕生」



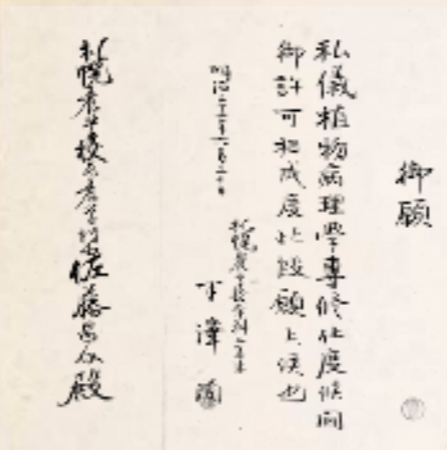
1. 農学専攻の教授・学生等 (1901年、大学文書館蔵) 後列右から2番目が南鷹次郎教授



2. 第19期生半澤洵の植物病理学専攻願 (1899年、大学文書館蔵)



3. H.B.アダムズ教授 (アメリカ議会図書館蔵)



4. 宮部金吾宛て新渡戸稲造書簡 (1895年11月13日付け、大学文書館蔵)



5. ジョンズ・ホプキンス大学在学中の新渡戸稲造 (1885年、附属図書館蔵)

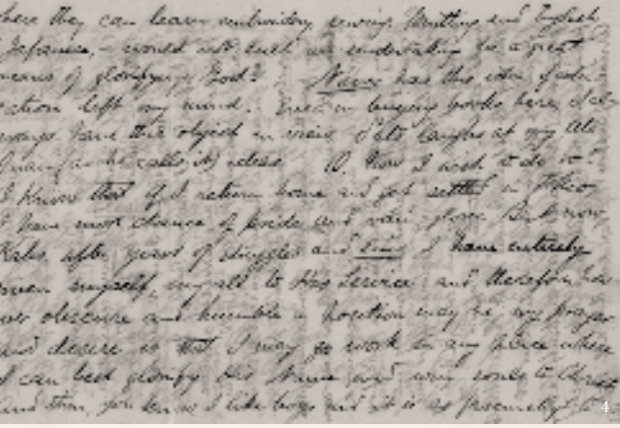
6. 植物病理学専攻の教授・学生 (1895年、植物園蔵) 前列左端が宮部金吾教授

7. 畜産学実験室の畜産学専攻学生 (1906年、大学文書館蔵)

8. 札幌農学校第2期生 (1879年、植物園蔵) 前列左から太田(新渡戸)稲造、内村鑑三、後列右から2番目が宮部金吾

9. 第13期生高岡熊雄の農業経済学専攻願 (1894年、大学文書館蔵)

10. 農業経済学専攻の教授・学生 (1895年、大学文書館蔵) 前列左から佐藤昌介校長、一人おいて高岡熊雄、新渡戸稲造教授



新渡戸稲造の学究遍歴

札幌農学校第二期生新渡戸稲造は好奇心に富んだ学生だった。在学中、読書に耽り、図書館の文学・伝記・宗教等に関する英書は読破したという。一八八一年に農学校卒業後、開拓使・農商務省の官員として北海道で仕事に従事したが、向学心止み難く、一八八三年に職を辞して東京大学に進学した。しかし、東京大学での講義には満足できなかった。同じ第二期生だった宮部金吾に宛てた一八八四年四月二十日付けの手紙で「僕は大学の教育にうんざりだ。ここで存分に学べると思っていたが、そうではなかった。本はたくさんあるが、良い先生はそういない。」と書き送った。その半年後、新渡戸はアメリカに渡る。

アダムズ教授の“seminary”

ボルティモアのジョンズ・ホプキンス大学に入学した新渡戸は、大学の教育環境に満足している様子を一八八五年十一月十三日付けで宮部に書き送った。特に“seminary”のインパクトは大きかったようだ。

セミナリー(すなわち大学院の課程)に出席し、講義に深い感銘を受けると、僕はこうつぶやく。「札幌でこんな制度を作れないものだろうか?」

新渡戸が出席した「セミナリー」は、歴史学教授ハーバード・バクスター・アダムズ博士の講義であった。“seminary”

に深い感銘を受けると、僕はこうつぶやく。作れないものだろうか?」と。

は、通常は“seminar”(英語読みでは「セミナリー」、ドイツ語読みでは「ゼミナール」)、日本語では「演習」、「ゼミ」と称される場合が多い。専門性の高いテーマについて教授と少人数の学生が議論しながら進める講義形式である。現在の日本ではどの大学でも見られる講義風景であるが、当時の日本では教授が多数の学生に向かって口述する形式が一般的であった。アダムズ教授の歴史学「セミナリー」には、ベルリン大学を卒業した博士や白髪交じりの牧師などを含む学生二十名程度が出席していた。ドイツ流の実証主義歴史学を取り入れた内容とも相俟って、新しい高等教育のモデルとしてアメリカでも注目を集めていた。日本の大学に飽き足りなかった新渡戸にとって、は、良き師、良き学び舎との出会いであった。新渡戸はこの後、ドイツに留学を経て、一八九一年に帰国、札幌農学校教授に就任した。

実科実習制度

そのころの札幌農学校では校長心得に就任した第一期生佐藤昌介を中心に、外国人教師が主要学科を教授する体制から、専門分野を持つ卒業生が教授陣を形成する体制へと移行し始めていた。新渡戸も農政学・農業史を専門とする教授としてその一翼を担うこととなった。新渡戸は早速、学校のカリキュラムの全面改正を提案し、実施責任者となった。

さらに一八九三年、札幌農学校は実科実習制度を導入した。これまでの札幌農学校生は四年間、同じカリキュラムの講

義を受け、卒業論文についてだけそれだけの専門の教授から指導を仰いでいた。実科実習制度では、最初の二年間は共通のカリキュラムで講義を受け、三年生からは農業経済学・農芸化学・植物病理学の三つの「実科」、農芸(農学)・牧畜(畜産学)の二つの「実習」から専攻分野として一つを選択して専門的に学ぶこととなった。一八九七年には「実科」に農用動物学も加わり、六専攻の体制となった。

ゼミナールの誕生

実科実習制度により、新渡戸が感銘を受けたジョンズ・ホプキンス大学の「セミナリー」の実現が可能となった。ゼミナールの誕生である。新渡戸は佐藤昌介と共に農業経済学ゼミを担当した。このとき、農業経済学ゼミに所属した第十三期生高岡熊雄(後に第三代北大総長)は以下のように回想している。

セミナリーに出席し、講義「札幌でこんな制度を

札幌農学校で、農業経済学専攻制度が開始されました時、採用した研究法は演習です。この言葉はこの時始めてわが学界で用いられたもので、いうまでもなくドイツ語のゼミナール Seminar の訳語です。この訳語は今日ではわが国の学界で広く一般に用いられておりますが、最初私どもがこれを用いた当時には、よく陸軍の演習と誤解されたものです。…初期の農業経済学演習で課した科目は、応用経済、日本農史、農業統計、田制でした。…第四年級では、農業経済学専攻生は私一人であって、佐藤昌介および新渡戸稲造両先生の懇篤な指導の下に、専攻学科を研究することが出来たのは、私として限りない幸いでありました。

札幌農学校の実科実習制度とゼミナールは、この後、北大の学科・講座の基盤となっていく。



1891年 2月	- 新渡戸稲造がアメリカ・ドイツ留学から帰国
3月	- 新渡戸稲造が札幌農学校教授に就任
8月	- 佐藤昌介が校長心得に就任
10月	- カリキュラムを大幅に改正
1893年 7月	- 札幌農学校が実科実習制度を導入
9月	- 農業経済学・農芸化学・植物病理学・農芸・牧畜の専攻制度実施
11月	- 最後の外国人教師A.A.ブリガムが離任
1894年 4月	- 佐藤昌介が校長に就任
1897年 7月	- 実科に農用動物学が加わる
1907年 9月	- 札幌農学校が東北帝国大学農科大学に昇格、農学科・農芸化学科を開講
1910年 9月	- 畜産学科・林学科を開講
1913年 9月	- 農学科第一・第二・第三部、農芸化学科、林学科、畜産学科第一・第二部に改編、各科に講座を設置

大学文書館 だいがくぶんしょかん Hokkaido University Archives
北海道大学に関する歴史的な資料を収集・整理・保存して利用に供するとともに、北海道大学史に関する調査・研究を行っている。